

地域と学校の文化・スポーツ活動

生活主体と結びついた文化・スポーツ活動のあり方について

荒井 到
桑原 清

一、はじめに

今年度の分科会は、全体で七つの報告（一つは口頭報告）があった。

（担当 桑原）

①地域の大学サークルが地元の小学校と共同演奏することに
よって相互に地域の重要性を認識するということ。

②3・11被災地への学校の関わりと活動を通じて成長する
子どもたち。

③部活動のあり方をめぐる諸問題。

④高校図書館の実態に関すること。

⑤演劇を通しての地域の文化活動の展開と継続。

⑥ 講演を通じての被災地慰問から感じたこと。
⑦ 校歌研究をめぐって。

昨年度と違って「部活動（スポーツ）の報告」「学校図書館の報告」「演劇活動の報告」「被災地にかかわる報告」がジャンルとして加わった。共通テーマを強いて挙げれば、「学校の教育活動の広がり」と地域との「連帯」ということになるのであろうか。

学校の教育活動というところでは幾つか重要なことが分科会で共有された。

（イ）大学を含めた学校のサークル活動について、地域の親や住民たちからの言葉（感動・励まし・感謝）を聞くことにより、子どもや学生自身が成長していく。

（ロ）地域でサークル活動を行う際に、学校の課内・課外活動と連携していくことで現状を打開する可能性がある。

（ハ）学校統廃合政策の下にあって、地域のクラブ活動を維持・発展させていくためには、地域の協力を得ながら複数校連合クラブを想定することも必要である。

（ニ）学校図書館活動を発展させていく場合、ハード面での重要さは指摘するまでもないが、それより大切なことは人的な問題である。つまり、どういう人間が活動を担っていくのかが決定的な事項である。

（ホ）被災地と関連した活動を行っていく場合、ボランティアの人たちだけでなく子どもの「探究的体験的学習」を位置

づけることが重要である。

ところで、第二日目に多くの学生さんが参加され、質問や意見などの発言があり、積極的な関与をしてくれた。大学の授業の一環であり、昨年同様二日目のみの参加であったが、子ども・学校・地域の活動状況について意見交換を行ったのは意義深いことと考えられる。世代文化の継承という点からも、討議・内容上の対応などを別個に考える必要があるのではないか。

二、報告と討議

(担当 荒井)

以下、時系列に沿って二日間の分科会の内容を記す。

1 『ピュア・モルトからのおくりもの』

く教育大学交響吹奏楽部

「鹿追町 ウィンターコンサート」

釧路市立興津小学校 笹本 裕一

① 報告の概要

「ピュア・モルト」——ウイスキーではなく、宿泊施設の名で

ある。副題にある演奏会時に教育大釧路校の部員が泊まり、地元鹿追町の後援者と親睦を深める場所。演奏会は大学生の他、鹿追小・中・高(小学校から高校まで一貫教育)と瓜幕中学校の部活動の児童・生徒たちが参加する。報告者は教育大釧路校交響吹奏楽部の指揮者を務めており、演奏会では第二部の合同演奏を受け持つ。報告者は夏の練習時に外部講師からきつい言葉を浴びせられてトラウマになっていたが、それを振り切つてのステージ。また教育大の学生たちも、リーダー二人の衝突という試練を乗り越えての晴れ舞台であった。それだけにコンサートが成功裏に終わったときの感動はひとしおであったが、それは小・中・高生の演奏者そして後援者たちとも共通のものであった。

競争・差別・選別の日常にあって、協同と連帯、優しさと尊厳の大切さを感じられる二日間であった。

さて、小学生の演奏者の一人が、「鹿追高校に進んでカナダに行く」ことを夢として語った。小中高一貫教育の成果である。

② 討議

日本の競争社会の中でのこの取り組みをどうとらえるかが討議された。結論として、たとえば学力テストで点数を取ることではこの実践のごとき共同・尊厳を意識させることは難しい、と落ち着いた。そもそも家庭を含めたバックボーンの異なる子

どもたちを画一的に成績だけで判断・評価するのは乱暴なこと、しかしそういう面をことさらに求める自治体のあることも、討議の中で話題になった。

2 『夢ハンカチ』をつなぐ地域と学校』

枝幸町立枝幸小学校 杉本 真樹

① 報告の概要

五年生の音楽で「Dream and Dream」夢をつなごう」という曲を歌うことになった。この曲は「夢ハンカチ」の運動を応援するものでもあった。

「夢ハンカチ」とは、夢・希望・目標などを描いたハンカチを全国から集め、それをつないで富士山頂まで届けるというもの。六年生児童会役員、学校地域支援本部のコーディネーター、地元の人々のよびかけ・協力によって、枝幸小学校でもこの取り組みが行われ、学芸会で展示された。

曲の方は、六年生が歌を受け持ち、港で歌うという試みに発展していった。

② 討議

コーディネーター（役場の人で、週四日小学校、残りは中学校に行き、地域と学校の連携を図る。水泳やスキーの補助者を

組織するなど）の存在の大きさが確認された。他の地域のこのような存在があれば、という声しきりであった。

3 『部活動の実態と課題について考える』

江差町立江差北中学校 石橋 英敏

① 報告の概要

報告者が高校生の時、指導を受けた野球部の監督は「全員野球」を標榜し、勝利至上主義とは一線を画した指導で自チームを地区大会決勝（つまり、あと一勝で甲子園）まで導いた。報告者も紆余曲折を経ながら教員になり野球部を受け持ち、「人間的な成長を育む」のを第一義に、今監督をしている。個々の毎日の努力の積み重ね、バックアッププレーをはじめとした心の結びつきなどが人間形成に寄与するものは大きい。

一方で部活動全体については問題も多い。教員の負担感、地域・父母の期待の大きさから来る過熱化、生徒の中には熱中しすぎることに伴う障害も。考え方や方向性をまとめるのは難しい。

② 討議

生徒が部活動を行うメリット・デメリットと共に、教員のそれは何なのかという討議がなされた。また報告者から発言を

促したこともあり、学生の参会者から所属している（していた）部活動についてのコメントが多く出た。いずれも肯定的にとらえるものばかりであったが、顧問や先輩後輩との関係についての苦労なども語られた。

4 口頭報告『校歌の調査』

函館市立臼尻小学校 渡邊 孝久

報告者の祖父が多くの校歌の作曲を行った。その足跡を辿るうち、校歌が文化の一翼を担っていることから、祖父と関わりのないものでも調べるようになった。特に統廃合になった学校のものはそのままで記憶の彼方へ消し飛んでしまう。もし情報があれば頂きたい、また呼びかけもお願いしたい―以上が報告者からの話で、参加者からは「図書館に聞いてみては」などの意見が出された。（新聞切り抜き・校歌楽譜の資料あり。）

5 『高校図書館の実態報告』

釧路工業高校 島山 佳代

① 報告の概要

図書館の構成要素は資料・施設・人である。北海道はそのどれを取っても充分ではない。資料については予算が不足している。

施設については図書館の機能を知る人が設計にかかわらなければならぬのだが、行われていない。人については図書館担当者が目まぐるしく変わる。この中で最も重要なのは人で、心ある担当者が知恵を絞って使いやすい図書館作りに奔走している。

② 討議

具体的予算額（年間十万円という事例も）、インターネットの是非（情報を鵜呑みにするのは問題。ネット小説は本への入り口としては良い）などが論じられた。選書について「読み聞かせを重視するので少ない予算が文学作品購入に偏り、結果として調べ学習に使える書物を揃えるのが難しくなる」という現状も話された。

6 『演劇を通して見た地域の文化活動の課題』

函館商業高校 下間 隆雄

① 報告概要

報告者は子どもたちが七飯町民劇場に出演することをきつかけにその裏方を担当した。二〇年（二年に一回）続いたこの活動はまさに町民手作りの演劇であったがスタッフの高齢化・多忙化などもあり、終了することとなった。これを惜しむ人々が「翔民劇団ななえ」を立ち上げたが、舞台裏を知らない出演者やト

ラブルメーカーとなる人などもいて、大変な船出となる。現在第二回の公演に向けて準備中で、最も頭の痛いのは以前と違いい子どもが集まらなくなっていることである。運動の発信者と受け手との「人のつながり方」(間に入る組織・人間なども含め)の重要性を感じている。

② 討議

北広島の人形劇団にいた参加者からの実践の話があり、こちらから出向くこと・小まめに広く接触を持つことで、多くの子どもが興味を持つ例も語られた。地域や家庭事情(送迎の都合・金銭面での都合)など、解決の難しい要素も多い。

7 『講談での被災地慰問〜二年目の仮設住宅に行く〜』

東家夢助事務所 荒井 到

昼休み、報告者によって講談『三浦綾子伝』が実演されたあと、本報告が行われた。三回にわたる慰問の詳細と、被災者の実情の説明、現場での悩み事は物資から心の問題に移ってきていることが語られた。

討議の中では男性に引きこもり傾向が強く、慰問やイベントに関しては女性に好まれる内容のものが多しなどの指摘があった。

三・分科会のまとめ

(担当 荒井)

「一、はじめに」の項の「学校の教育活動というところでは以下(イ)〜(ホ)の欄がすでにまとめとなっているので、ここではその補足を述べるにとどめる。

授業の外側にあり、地域や子どもたちと共に歩むという共通項を持つ本分科会。その問題点や悩みも共通するところがいくつもある。資金・人集め・スタッフの高齢化・トラブルメーカーの存在など。何かに似ていると思ったら、担当者が現役教員だった頃の組合活動(トラブルメーカーは他ならぬ私)いや、さらには日本全体の姿のようにも思える。地域の文化・スポーツ活動は人間性を支える柱ともいえるのだが、これを失ってしまったらどう組織していくのかは(組織変えも含め)ともかく、このような内容を話題にする場合は必要であろう。

四・来年度の課題

〜来年度を含め、今後の課題〜

(担当 桑原)

昨年の報告レポート二本に対して、今年はいくつかの報告も含め七

本のレポートが提出された。事務局の奮闘に敬意を表したい。しかしながら、その半面討議の時間がやや足りず、議論の焦点化に困難を感じた。今後の課題については、次の四点が考えられる。

(イ) スポーツと文化活動を同一の分科会で議論するのが可能なか検討する必要がある。百歩譲って可能であるとした場合にそれぞれの分野の専門家が共同研究者として存在しなければならぬ。

(ロ) 本分科会の特徴の一つは、学校と地域の連携である。運動会・学芸発表会、学校行事をはつきりと打ち出す必要がある。

他方で、学校とは切り離された形での地域における文化・スポーツ活動ということも重要な特徴の一つである。両立が可能かどうか今後検討しなければならない問題であろう。この検討が次の(ハ)にかかわって来る。

(ハ) 今回、学校図書館司書の方からの報告があった。この分野は何年か前に集中的に議論されたことがあり、一定程度の蓄積がある。実行委員会加盟団体の構成を見てみると、教職員組合関係だけでないことは一目瞭然である。参加者数、すなわち量的な問題と質的な蓄積の問題は相

即的なことと考えられる。多様な参加者となる程度の焦

点化された議論の質の確保との中点を模索することが今必要となっている。

(ニ) 他の分科会との棲み分けも含めて、本分科会の性格をより明確にする必要がある。

(荒井 到…東家夢助事務所)

(桑原 清…北海道教育大学札幌校)